

## 7 国際交流

### 進捗状況報告

国際レベルでの教育研究交流として、2007年7月にインドネシアのサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学とツィニング・プログラム（連携した二つの大学院から修士学位を得られる制度）の協定を締結した。これは、サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学で1年間のコースワークによる修士学位（M.Si）を取得した学生を、理工学研究科博士課程前期課程に大学院特別学生（外国人）として受け入れ、2年次に編入学させるプログラムである。2007年度にはサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学の大学院生を、3名受け入れている。また、2008年7月に中国吉林大学生命科学院と理工学部との間で連携協定が結ばれる予定であり、今後ますます両校の関係は強化されていくものと思われる。他に、各教員レベルの国際交流も引き続き活発に行われている。以下、2007年度における実績から進捗状況を説明する。

理工学研究科へ受け入れた外国人（教員・研究員）は、2007年度は客員教員3名、客員研究員1名、受託研究員4名、博士研究員8名、外国人特別研究員2名である。また、協定校からの教員や学生を受け入れる制度があり、中国の吉林大学やインドネシアのサティヤ・ワチャナ・キリスト教大学から、2007年度は教員1名、学生3名を理工学部に受け入れた。

理工学研究科の教員による教育研究成果の外部への発信については、多数の英文による論文発表の他、国際シンポジウム・国際会議の開催など高水準を保っている。国際学会への参加・国際共同研究・招待講演等の海外出張も、引き続き増加している（2005年度は75件、2006年度は67件、2007年度は81件）。国際交流推進のための委員会としては、2007年度に吉林大学生命科学院との連携を強化するための連携委員会が新たに設置された。

### 学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

国際教育・協力委員はすでに任命されていたが、2007年度は吉林大学連携準備委員会が設置されたため、連携協定締結に向けての準備に活動が費やされた。本学理工学部（理工学研究科）は、理工系教育研究機関として規模が小さく、いたずらに国際協定・交流の拡大を行うことは双方にとって利益があるとは考えにくい。ただ、指摘にもあるように協定大学に限ることなく、研究科全体の国際交流を戦略的に考える委員会が必要である。今後、国際教育・協力委員を中心に国際交流委員会の設置をただちに検討する。

### 学内第三者評価

国際化への対応や国際交流の推進のための組織的な取り組みによって、教員や大学院生の交流が進み、国際シンポジウムへの教員や大学院生の参加や国際会議の開催なども増加傾向にあるなど実績が上がっている。なお、2007年度の進捗状況報告にあった「理工学研究科あるいは理工学部の中に国際交流委員会のようなものの設置の検討」については、吉林大学生命科学院との連携を強化するための連携委員会が新たに設置されているものの、国際交流委員会のようなものの設置の検討が望まれる。

なお、学外委員からは以下の意見があった。  
協定校を中心とする学生交流や教員・研究員の受け入れは順調に改善されてきており成果と波及効果が期待される。

国際学会等への参加も増加傾向にあり他研究科が学べる点があるように思える。  
1協定大学との連携委員会設置も大切であるが、研究科全体の国際戦略を検討する国際交流委員会の設置はさらに重要と考えられるので早急な検討が望まれる。検討開始が遅れている理由はなにか。